

A M D A の守護神の双へきは、谷口澄夫先生と橋本龍太郎先生だった。八歳上の兄のごとき橋本先生との出会いは、永瀬隆氏の奥さまである藤原佳子さんが、橋本先生の地区後援会婦人部長をされていたご縁だった。

一九七一年の第一次岡山大クワイ河医学踏査隊の寄付集めから、新見市にある国際貢献大学校最高顧問まで、A M D A の歴史

A M D A 代表

菅波 茂

の中核におられた。国連経済社会理事會総合協議資格取得を、生前にご報告したかった。国際社会での政策提言を二人三脚でお願いしたかった。首相を辞されてからの私の淡い夢だった。

フランスのシラク大統領など、世界を動かしている政治家と堂々と対峙たいしされていた。知人のご長男の結婚式でのスピーチ。

「国際登山学会では何人のチームが最高の

組み合わせか調査をした。三人か、七人か、十人か。答えは二人だった。新郎新婦は最高の組み合わせの二人である。人生の峻烈げんれつな山々を協力して登頂してほしい」。追隨を許さぬ知性である。知性と見識は日本の財産だった。その知性が国内で評価されなかったのが、最大の悲劇だった。

八一年五月の菅波内科医院の開院式での祝辞。「今ごろなぜ開業するのか分からない」だった。翌月から現在も続く、厚生労働省の医療費抑制政策が始まった。一年後に倉敷市の事務所にお礼と報告にうかがった。しばしの徹談の後、東京に帰るため席を立たれた。数分後に慌ただしく帰ってこられてひと言。「菅波君の医院がつぶれていないのなら、政策は、まだ甘いな。よく言っとくよ」。シャイな独特のユーモアだった。

政治失脚に関して沈黙せざるを得なかった憤怒を転じて、A M D A の大守護神になっていただけることを祈念したい。